主体的学びを促す教育実践例

—2019 年度愛知学泉大学学内 GP 研究実施概要報告—

Practical Examples of Education to Promote Active Learning

—Report of 2019 Grant-in-Aid for Good Practices at Aichi Gakusen Univ.—

堀田　裕子　Yuko Hotta
（現代マネジメント学部現代マネジメント学科）

抄　録

本稿は、愛知学泉大学における教育研究助成制度「2019 年度愛知学泉大学学内 GP（Good Practice）研究」で採択された、「新城における養蚕後継者に関する調査研究――稲武での後継者獲得に向けて」の第 1 回調査実施概要を示したものである。この教育研究は、「社会調査法演習（質的）」の授業の一環としておこなった質的調査の設計から分析までを通じて、学生の専門的知識・技術、建学の精神、pisa 型学力、そして社会人基礎力を育成し身に付けることを主たる目的としている。

本調査の最中に、新型コロナウイルス感染症の流行をはじめとするいくつもの想定外の事態に遭遇し、2021（令和 3）年 1 月現在、未完了である。だが、研究協力者である学生 2 名のうち 1 名が今年度をもって卒業することから、一回の調査経験が学生教育にどのように活かされたのか、とくに主体的学びにどのようにつながったかを、調査過程の観察および学生へのインタビューを通じて考察した。なお本稿では、筆者が実践してきたゼミや講義における主体的学びを促す実践例についても説明しながら、ある種の疑似体験としての成功体験を通じた「ハビトゥス」としての主体性育成、および、「役割演技」の重要性に言及している。

キーワード

インタビュー　Interview　　主体的学び　Active Learning　　教育　Education
ハビトゥス　Habitus　　役割演技　Role Playing

目　次

1　研究助成制度と対象授業について
　1.1　愛知学泉大学学内 GP (Good Practice）研究
　1.2　社会調査法演習（質的）
2　申請概要
　2.1　テーマ
　2.2　本学の教育目標実現のために
　2.3　調査計画と資金計画および実際の支出
3　実施概要
　3.1　調査準備
　3.2　実査
4　教育成果――主体的学びを促す教育実践例
　4.1　「社会人基礎力」と「建学の精神」の育成
　4.2　主体的学びを促すプロジェクト―「ハビトゥス」の観点から
　4.3　学年が異なる学生同士の「役割演技」
5　第 2 回調査に向けて

1　研究助成制度と対象授業について

まず、本教育研究が対象となった助成制度と、対象授業について説明しておく。

1.1　愛知学泉大学学内 GP (Good Practice）研究

「愛知学泉大学学内 GP（Good Practice)」（以下、「学内 GP」と略）とは、「愛知学泉大学の教育目標を実現する上で必要な教育又は教育研究に関する取組みの中で、特に優れた取組みを支援する」という目的のもと、全教職員を対象とした研究助成制度である。申請者は、応募テーマとともに、12 項目ある取組み目標の中から 1 つ以上を選んで申請する。

筆者は、2016（平成 28）年度の同研究助成に応募し採択されたが、その際には、(2-2）社会人基礎力を身に付けるための教育に関する研究と、(4-2）専門的知識・技術を身に付けるための教育に関する研究の 2 項目を掲げ、稲武地区の交通に関する質的調査経験を通じた教育研究をおこなった（堀田 2017)。今回の教育研究では、前回と同じ取組みに加え、(1-2）建学の精神を身に付けるための教育に関する研究と、(3-2）pisa 型学力を身に付けるための教育に関する研究の 2 項目を追加し、計 4 項目で申請し採択された。

本学の「建学の精神」は教育現場において、本学園の創立者である寺部だいの生き方が集約された「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神というかたちで実践的に目指されている [1]。これは、「真心を込めて行うこと」、「常に努力すること」、「奉仕の精神を忘れないこと」、「何事にも感謝できること」の重要性を強調するものである。だが、「感謝」については、「感謝すること」だけでなく「感謝されること」の意義も込められている [2]。

また、本学の教育目標の一つである「pisa 型学力」とは、課題を解決するために必要な知識・情報等の資源を獲得する力、獲得した知識・情報等の資源を活用する力、獲得した知識・情報等の資源を活用して課題を解決する力という 3 つの力を統合した、課題解決型学力のことである [3]。OECD（経済協力開発機構）は 3 年に 1 度、主に加盟国の 15 歳を対象に学習到達度調査をおこなっているが、その際に「PISA 型学力」という指標が用いられている。だが、知識を獲得し活用し課題解決をするということは、子どもにとってのみならず、高等教育を受ける学生にも大人にも必要な能力である。そこから、「PISA 型学力」の意味内容を、社会生活を営むうえで誰にでも必要な能力として拡張および一般化し、小文字の「pisa 型学力」として表わされているといえる。

そして、「社会人基礎力」は、2006（平成 18）年に経済産業省が提唱した「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」である [4]。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力と 12 の能力要素から構成されており、本学の教育目標の一つとしても掲げられている。

以上の本学における教育目標を、次節で説明する授業のなかで実践していくことが本教育研究の目的である。

1.2　社会調査法演習（質的）

愛知学泉大学現代マネジメント学部現代マネジメント学科は、2011（平成 23）年に開設されたが、その前身であるコミュニティ政策学部の時代、2004（平成 16）年 9 月に、社会調査士認定機構（現・社会調査協会）[5] より社会調査士資格を取得する科目を設置している機関として認定された。科目設置当時、愛知県下の認定校は本学を含む 5 校しかなかったが、現在ではほとんどの社会学系の大学で資格認定されている。

社会調査士資格は、所定の単位を取得することで授与される。本学部では、A 科目として「社会調査入門」、B 科目として「社会調査方法論」、C 科目として「統計学 1」、D 科目として「統計学 2」、E 科目として「データ解析 1・2」、F 科目として「社会調査法演習（質的）1・2」、G 科目として「社会調査法演習（量的）1・2」が設定されている。このうち、A・B・C・D・G 科目は資格取得のための必修科目で、E 科目と F 科目はいずれかを選択するかたちになっている。本学部では、A・B・F・G 科目は要卒単位に含まれていない。そのため、E 科目と F 科目のいずれかを選択する際、多くの学生は要卒単位となる E 科目を履修し、F 科目履修生は例年非常に少ない。だが、だからこそ F 科目である「社会調査法演習（質的)」を履修する学生は、はじめからその授業内容に対する学修意欲が高いといえる。

「社会調査法演習（質的)」では、インタビューやフィールドワークといった質的調査に関する知識と技能を学ぶ。社会調査史のなかであるいは多種多様な社会調査のなかで、質的調査がどのように位置づけられるかを理解した後、質的調査に基づく先行研究をレビューしたり、質的調査の手法を演習的に学

修したり、この調査法の問題点を理解したりする科目である。2019（平成 31）年度は、当時 3 年生の松井美冴希氏と 2 年生の丸地賢典氏の 2 名が受講した。受講生には、授業の一環として「ホンモノの」社会調査を経験させたいと考えていたことから、春期のうちに「学内 GP」申請についてかれらに相談したところ、即答で快諾してもらえた。2016（平成 28）年度の「学内 GP」は、筆者が調査計画等を練り、受講生には基本的に実査以降の過程で参加してもらったが、今回は調査計画を含め全段階で受講生に参加してもらうこととした。したがって、ふたりには、本調査の背景知識として豊田市稲武地区の養蚕史や後継者のない現状について理解したうえで申請書類を一緒に作成するために、授業時間外にもたびたび集まってもらった。

2　申請概要

本章では、申請内容の概要とともに、資金計画および実際の支出に関する説明を通じて、調査計画について説明する。

2.1　テーマ

筆者は「学内 GP」の応募テーマを、「新城における養蚕後継者に関する調査研究——稲武での後継者獲得に向けて」と題し、申請した。

愛知学泉大学現代マネジメント学部は、2014（平成 26）年度から愛知県豊田市稲武地区にある養蚕団体「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」の支援活動を、主に「現代マネジメント実習」の授業において実施してきた。その目的は、後継者獲得に向けての周知である。というのも、団体メンバーが高齢化しており、明治時代から続く稲武の養蚕という伝統が途絶えてしまう危機に瀕しているからである。

具体的には、毎年 5 月に稲武で開催される「歩かまい稲武」でのイベント支援や 11 月に開催される「もみじまつり」でのイベント開催などのほか、東山動植物園や奥矢作レクリエーションセンターでおこなわれる各種イベントにおいて、稲武の養蚕を PR するためのパネル展示、来場者への説明、糸引きの実演、繭細工教室などをおこなってきた。今年度の 2020（令和 2）年度をもって「現代マネジメント実習」は終了するため、後継者獲得に成功した養蚕団体の事例を調査し、その過程を分析することによって、「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」の後継者獲得につなげたいと考えたのである。

以前、「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」代表の金田平重（かなだへいじゅう）氏から「新城の海野さんのところは後継者がいるらしい」というお話をおききしたことがあった。過去の新聞記事やインターネットの情報をたどると、確かに新城市で養蚕の伝統を守り続けている海野久栄氏のところには、後継者として女性が 2 名いることが分かった。そこで、新城の海野氏とその後継者 2 名から、経緯などについておききしようと考えた。そして、次のように「取組み内容と計画」を設定した。

> 明治時代から続く豊田市稲武地区の養蚕は、現在、一般財団法人古橋会の財政支援を受けて「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」（代表：金田平重（かなだへいじゅう）氏）が継承している。だが、代表をはじめ団体全体の高齢化が進み継続が困難になりつつある。本学部の「現代マネジメント実習」では、学生たちが稲武の養蚕についてイベントで周知させたり、メンバー募集チラシを作成・配布したりといったかたちで、本団体の後継者獲得に繋がるよう活動してきた。実習は今年で 5 年目となるが、本学部閉鎖前に、学部として大変お世話になってきた「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」のために、後継者獲得にもっと直接繋がる恩返しをしたいと考えてきた。
>
> そこで、養蚕農家として後継者獲得に成功した新城市の事例をもとに、学生とともにその課題解決に取り組みたい。愛知県には 2 軒の養蚕農家があり、そのうちの 1 軒は「いなぶまゆっこ」で、もう 1 軒は新城市の「出沢（すざわ）やままゆ養蚕所」である。代表の海野久栄氏もご高齢であるものの、すでに 2 名の女性後継者がいる。彼女らは新城に移住し海野氏から養蚕を学んでいるが、後継者獲得までのプロセス、後継者となるまでの意思決定プロセス、現在の生活などについて、学生とともにインタビューする。稲武にも新城と同様の地理的・社会的特性があり、それらが後継者獲得を妨げていると考えられることから、新城調査をある種のケーススタディとし、その結果をもとに稲武の課題解決を図る。
>
> なお、新城へは 2 回の訪問を予定している。全く初対面の方々であるため、1 回目は趣旨や養蚕と本学との関わりなどについて挨拶程度に交わし、ラポールを形成する。2 回目は本調査

として、運営や生活の資金といった内容にまで踏み込むインタビューや可能な限りでの撮影をおこなう。そして、最終的には学生と連名で報告書を作成し、「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」および一般財団法人古橋会に報告する。

このように、これまで実習を通じてお世話になってきた「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」に教育活動を還元し、また同時に、質的調査教育に稲武との繋がりを還元していくことを目指した。

ところが後述するように、この「取組み内容と計画」は、大幅な変更を余儀なくされることとなる。

2.2　本学の教育目標実現のために

前節で説明した調査を、本学の教育目標および質的調査に関する知識と技能の修得のための教育研究として位置づけた。それぞれの育成目標の観点から、「期待される効果」を次のように構想した。

本研究は、「社会調査法演習（質的）」の受講生２名（3 年生女子と 2 年生男子）とともに実施する計画であり、学生たちには、調査企画から報告書執筆（授業期間終了後）までのすべてのプロセスにおいて協力してもらえるよう、すでに依頼し承諾を得ている。

本授業はインタビューなどの質的調査を学修するものであるため、本研究を通じて学生たちは授業内で培った専門的知識・技術を、実査というかたちでさらに養うことができる。しかも、実査は、私が教育において最重視する「一回性」を学生にとくに強く意識させることができる。

授業内では、「社会人基礎力」のすべての能力要素を発揮・育成することも目指されており（たとえば、インタビューという会話の流れのなかにあっても、自分がきかなくてはならないこと・ききたいことを質問することができる「働きかけ力」など）、その意味で、学生たちのこれら能力を育成するために、教員としてどのように支援し教育していくべきかを考えることができる。

また、受講生のうち１名は「現代マネジメント実習」で稲武地区とすでに関わりのある学生であり、実習の目的や内容に大変満足してくれている。その実習地である稲武に恩返しさせていただきたいという目的もある。

その意味で、本研究は、「真心・努力・奉仕・感謝」という本学の「建学の精神」をさらに育成することにつながると考えられる。

そして、本調査研究の最終的な目的は、新城調査をもとに、稲武の養蚕後継者獲得につなげることである。稲武の抱える課題を踏まえたうえで、稲武や新城に関する知識および新城の事例をヒントに、その解決策を探究していくという点で、「pisa 型学力」の育成も期待される。

専門的知識・技術については、前回の「学内 GP」と同様に、授業内で学修してきたインタビューの手法を「ホンモノの」インタビューの場で実践し、自分自身の技能を確認し向上させていくという点で重要な意義を持つ。頭で理解しても、実際にやってみなければインタビュー技能は上達し得ない。また、今回は調査の設計から報告書作成まですべてのプロセスで学生に携わってもらうことで、前回以上に専門的知識・技術を修得できることが期待される。

「pisa 型学力」については、新城と稲武の両地域における養蚕の歴史的伝統に関する知識を獲得したうえで、後継者獲得のケースに学びつつ稲武における後継者獲得という課題解決が目指されている。また、この背後には、インタビュー手法の「獲得・活用・解決」というプロセスも含まれている。

「社会人基礎力」については、インタビューという活動を通じて、その能力要素のすべてを発揮させ育成することが目指されている。なかでも「主体性」の育成をもっとも重視しており、どのようにして主体的で深い学びが可能であるのかを、学生たちの様子を観察しながら考察していきたい。

そして、「建学の精神」については、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神を学生たちが調査プロセスのなかでどう培っていくのかを注視していく。

さらに、学生たちには、前回の「学内 GP」において得た気づきである「一回性」の重要性を意識した教育も目指した（堀田 2017）。

2.3　調査計画と資金計画および実際の支出

本教育研究の計画を、資金計画（表 1）に基づいて説明していく。

採択された場合、年度内に実施することが定められているため、第 1 回調査を 2019（令和元）年 11 月に、第 2 回調査を 2020（令和 2）年 3 月に実施する予定とした。第 1 回調査では、初見の挨拶、調査

表 1　「新城における養蚕後継者に関する調査研究」資金計画（支出予算）

科目	金額	内訳
交通費（学生、公共交通機関利用）	18,000	自宅-新城駅間（2 名、2 回分）
交通費（堀田、自家用車・高速道路利用）	20,000	自宅-新城間、新城内（2 回分）
宿泊費（学生・堀田）	60,000	2 回分
謝金	10,000	団体にお渡し
手土産代	6,000	2000 円×3 人分
IC レコーダー	12,800	1 台（1 台はすでに所有）
バッテリー	4,360	IC レコーダー2 台分
雑費	2,000	コピー・電話代等
合計　133,160 円		

表 2　「新城における養蚕後継者に関する調査研究」支出金額

科目	金額	内訳
交通費（学生）	3,840	豊橋-新城間往復 840 円　新豊田-新城間往復 3,000 円
交通費（堀田）	10,895	自宅-新城-稲武間往復 305 ㎞ ガソリン 7,625 円＋ETC3,270 円
宿泊費（学生・堀田）	25,500	8,500 円×3 人
謝金	11,136	謝金 5,568 円×2 人
手土産代	3,240	
切手代	500	
合計　58,611 円		

についての説明をした後、計 3 名のインタビュイー（海野氏と後継者 2 名）がいることから、あくまでも養蚕の話題に限定しておきし、個々人のライフストーリーに関しては、一定程度のラポールができた後の第 2 回調査できくことを予定していた。

調査地には、高速道路を使った場合、本学豊田学舎から約 1 時間、筆者の自宅からは約 1 時間半かかる。付近は中山間地域で必ずしも交通の便が良くないため、公共交通機関ではなく、筆者の自家用車を利用することとした。インタビューのほか、新城市内の散策やインタビュー直後のデータセッションを予定していたことから、新城市内で宿泊することとした。このことが、結果的に功を奏することとなる。

「学内 GP」の上限は、申請者 1 人当たり 10 万円だが、謝金など諸々を含めて支出予算合計は 13 万円を超えた。申請は許可されたが、10 万円を超える分については、個人研究費で補填することとなった。

しかし、調査を計画通りに進めることができなくなった。新型コロナウイルス感染症の流行である。対象者の一人が 90 歳を超える高齢者であることもあり、2020（令和 2）年 3 月に予定していた第 2 回調査は延期せざるを得なくなった。第 1 回の調査終了時の支出金額については表 2 に記してある。幸い、2020（令和 2）年度（すなわち今年度）への研究資金の繰り越しが許可されたものの、現在まで第 2 回調査実施の見通しは立っていない。また、それ以外にも想定外の出来事がいくつも生じた。

3　実施概要

「学内 GP」調査の計画から実査までのプロセスと、実査の際に生じたさまざまな想定外の出来事について報告する。

3.1　調査準備

先述のように、今回の「学内 GP」申請に際しては、受講生たちと一緒に申請内容や調査計画を綿密におこなった。週 1 回の授業時間ではとても足りず、授業時間外にも集まらなければならないこと、また、授業が終わり単位が出された後も集まらなければならないことをあらかじめ伝えたが、ふたりとも快諾してくれた。なお、ふたりは受講前、接点がなかった。

学生たちには、過去に筆者が使用したものを参照

してもらいながら、「調査協力のお願い」（図 1）と「調査参加の同意書」を作成してもらった。そして、全員のスケジュールを照らし合わせ、調査日時を 2019（令和元）年 11 月 16 日午後もしくは 17 日午前で、先方と調整することとした。

令和元年　11 月　16 日

様

研究代表者：堀田裕子（愛知学泉大学）

「新城における養蚕後継者に関する調査研究」ご協力のお願い

私たちは、本学「社会調査演習（質的）」の受講生２名と教員１名で構成される調査研究グループです。以下の研究目的および実施内容等について、ご理解とご協力をお願いいたします。

《研究の目的》

現在、愛知県には２軒の養蚕団体があり、私たちはそのうちの１つである「いなぶまゆっこ」に実習の授業でお世話になっております。実習では、イベントで養蚕について周知したり、養蚕の魅力を体感してもらったりと後継者獲得に向けて活動してきましたが、現在までその実現には至っておりません。そこで、県内のもう１つの養蚕団体である新城の「出沢やままゆ養蚕所」様はこの問題に対してどのように考えられ取り組まれてきたのかをお聞きしたいと考えました。貴重な伝統を担う愛知県の２つの養蚕団体の抱える問題を整理し、報告書の形で公表したいと考えております。

《ご協力いただきたいこと》

本日、ボイスレコーダーでインタビュー内容を記録させて頂きたく存じます。

《守秘や個人情報、研究データの取り扱いについて》

この研究でお話しいただいた内容、逐語録を研究目的以外に用いることはありません。また、個人情報を保護するため、逐語録のお名前は符号に置き換えて管理いたします。IC レコーダーの録音データは、逐語録を作成ししたら廃棄いたします。匿名化し。個人が一切特定されない形にした研究データは、研究代表者の責任下にて管理いたします。

《お問い合わせ先》

この研究はすべて、研究代表者の責任下で行います。研究内容に関するご質問は、下記の連絡先までお願いします。

研究代表者：堀田裕子（愛知学泉大学 現代マネジメント学部 教授）
住所　〒471-8532　豊田市大池町汐取１
e-mail：hotta@gakusen.ac.jp
電話番号：0565-35-8398

図１　協力願い（学生たちが本調査の目的を十分に理解したうえで作成した。）

また、「インタビューガイド」も作成していった。これは、きかなければならない項目を列挙したものでインタビューには必携である。インタビューでは自由な会話のように対話を進行させるが、夢中になってきくべきことをきき逃す恐れがあるからである。

ところが、この準備段階で重大な想定外の出来事が生じた。

調査対象者である海野氏は、「出沢（すざわ）やままゆ養蚕所」を運営しており、ここは「新城まちなか博物館」として一般開放されていることが新城市のホームページに記載されている[6]。問い合わせ先として、新城市教育部生涯共育課の名称とメールアドレスが指示されていたことから、見学をさせていただきたいこと、授業および研究の一環として海野氏にインタビューさせていただきたいことなどを連絡した。しかし、1 週間ほど待っても返信が無かったことから、直接電話をして問い合わせたところ、こちらからのメールを見ていなかったとのことであった。その際、海野氏の養蚕をお手伝いしているＸ氏に連絡をするよう言われた。私たちが事前に集めた資料としての新聞記事にも、Ｘ氏の名前と連絡先が書かれていた。そこで、11 月 5 日、Ｘ氏に電話連絡をし、インタビューの日程を調整することとした。

そこで思わぬ話をきかされた。後継者の女性２名はすでにいなかったのだ。確かにある時期まで、女性２名が海野氏を手伝っていた。しかし、２名ともそれぞれの事情から海野氏のお手伝いをすることができなくなっていた。そして、かれらの代わりに海野氏を手伝っていたのがＸ氏だったのである。ただ、Ｘ氏は後継者というわけではなく、海野氏の息子さんが後継者になるだろう、とのことだった。

私たちは軌道修正を余儀なくされた。「取組み内容と計画」の設定という出発点に逆戻りすることになったのだ。作りかけていたインタビューガイドも書き直さなければならなくなった。「取組み内容と計画」は「新城の養蚕後継者についての当事者たちのヴィジョンを明らかにすること」に変更した。調整の結果、調査は、2019（令和元）年 11 月 16 日 13 時半から２時間程度の予定でおこなうこととなったため、それに間に合わせるべく、フェイスシートや養蚕事業（山繭飼育や伊勢神宮への繭糸など）に関する項目のほか、後継者関連として、少し前までいた女性２名、海野氏の息子、そしてＸ氏の４名に関する諸項目を設定し直した。

3.2　実査

調査日時が決定した以降も実査の段階でも、いくつもの想定外の出来事に出くわし、その都度軌道修正を強いられた。以下、時系列的に記しておきたい。

電話連絡した直後、Ｘ氏からショートメールが届いた。「稲武で『時の絲ぐるま』という映画をやるそうですが知っていますか」という内容であった。実は、いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）とその活動を支援している一般財団法人古橋会は、平成と令和の大嘗祭に際して繒服（にぎたえ）を調進する栄誉に恵まれ[7]、そのことを称え、地球写真家の石井友規氏が「時の絲ぐるま――平成の大嘗祭へ調進された二つの織物の物語」と題した 4K ドキュメンタリー映画を製作した[8]。その放映会が、11 月 17 日に稲武交流館にて開催されることになっていたのである。筆者も古橋会よりお誘いいただいていたが、調査候補日時と重なるため、残念ながら事前にお断わりしてあった。

しかし X 氏から、映画の情報を海野氏に伝えてほしいと依頼され、チラシをお送りしたところ、金田氏にお会いできる機会でもあることからぜひ観に行きたい、とお返事をいただいた。調査日時は 16 日午後になったことから、翌 17 日の上映会に海野氏と X 氏を新城から稲武に自家用車でお連れして、鑑賞することとなった（写真 1）。

写真 1　上映会でのひとコマ（最左が稲武の金田平重氏、その左隣が新城の海野久栄氏である。よく見ると、金田氏が海野氏の右腕を握っている。なお、手前後姿は金田氏の奥様である、ちゑの氏。）

また、インタビュー（写真 2）の流れで桑畑を見学させていただくことになり、インタビュイーらを含め計 5 名で筆者の自家用車で移動することとなった。途中、笠網漁で有名な鮎滝にも案内していただいた。その時点ですでに夕刻になっていた。

写真 2　新城でのインタビューの様子（松井氏が撮影した。左は海野氏、右は丸地氏。）

インタビューのお礼と翌日お迎えにあがる時間を約束したうえで、私たちが宿に向かおうとしたところ、X 氏がご自身の経歴を含めさらに話すことを申し出てくださった。せっかくの申し出であるため、私たちの宿泊先に来ていただき、食堂で夕食をとりながらインタビューを継続させていただくことができた。1 時間半ほどにわたって、非常に興味深いお話をきくことができた。

しかし、想定外の出来事であり本調査の最大の難題にもなったのは、X 氏から実名を公表しないでほしいと希望されたことである。このことはインタビューの最初の段階で言われていた。それは、X 氏は善意で海野氏の手伝いや養蚕の伝統を広める提案をしているのだが、懐疑的な見方をする人がいるかもしれないとのお考えからであった。ただ、お話をきかせていただいた私たちにとって、X 氏は大変興味深い経歴の持ち主であり、おそらくその経歴が現在の X 氏の献身的な活動につながっていると考えられる。しかし、彼の経歴を細かく説明すればするほど、実名公表に等しくなってしまう。本調査の報告書を公表する前には、当然ながらインタビュイーである X 氏に内容確認をさせていただくが、重要であるのに報告書に掲載できない内容が多くなる可能性がある。

4　教育成果——主体的学びを促す教育実践例

2020（令和 2）年 12 月 24 日に、改めて学生たちに対して本調査に関する所感などをきくインタビューと、今後についての打ち合わせをおこなった（写真 3）。ここでは、そのインタビューできくことができたかれら自身の言葉も交えて、本調査がかれらにどのような教育成果をもたらしたのか考察していきたい。その際、「建学の精神」、「社会人基礎力」……と教育目標ごとに記述する仕方はしない。学生たち自身、これらの諸要素を切り離して考えることはできないと語っていたからである。したがって、本調査を経て生じたあるいは観察された変化を軸に記述していく。

写真 3　学生たちに対するインタビューの様子（左は松井氏、右は丸地氏。この日、すでに冬季休暇に入っていたにもかかわらず（しかもクリスマスイブ！）、快く応じてくれた。）

なお、学生 2 名には、調査終了後すぐにトランスクリプト作成に取り掛かってもらった。途中、雑談や食事をはさみつつも計 6 時間近くに及んだインタ

ビューデータをすべて文字起こししてもらい、笑いと沈黙の秒数も記してもらった。丸地氏は文字起こしをするなかでタイピングの技能が上がったという。膨大なデータを処理するため、録音音声の再生を適宜止めては急いで打ち込む。この繰り返しのなかで、ほぼブラインドタッチでパソコンの文字入力ができるようになったのである。本調査研究は、このような想定外の成果ももたらしたことをあらかじめ付記しておく。

4.1　「社会人基礎力」と「建学の精神」の育成

学生たちが述べた教育成果として、「きく態度が変わった」という点が挙げられる。具体的には、「インタビュー中にメモをとることで、大事な部分が理解できるようになった」と言う。インタビューにおいては、録音をしながらでも必ずメモをとる。インタビューメモは、何時間にも及ぶインタビューのどのタイミングで、ある話題について語られたかを確認する際のインデックスとして機能する。また、書く行為によって語りを対象化し、これまでにききだした情報の整理とともに、次の質問についての考慮が可能になる。「どう返せばいいかがわかるようになった」と述べていたのも、メモを見ることでポイントが分かるようになったことの裏返しであろう。この経験は「傾聴力」と「発信力」の発揮と育成に、同時につながったと考えられる。

この学修経験を踏まえ、後述するように、松井氏は卒業研究において質的調査の手法を採り入れた。また、丸地氏もインタビューの一連のプロセスに関わったことで自信がつき、自分自身でやってみたいという気持ちになっていると言う。また彼は、「物事を知る方法を新しく身につけることができた」と語った。「傾聴力」と「発信力」は「知る力」でもあるのだ。

また、数々の想定外の出来事に出くわしたことは、調査計画の大幅な変更を余儀なくされるなど、柔軟性や計画力を要した。また、学生たちは（そして筆者も）長時間にわたるインタビューの緊張と集中で疲労していたが、ご自身の経歴を語ってくださろうというX氏のご好意を汲みインタビューを継続したことは、情況把握力やストレスコントロール力の発揮といえよう。このように、社会人基礎力のどの能力要素も不可分なかたちでフルに発揮・育成された。

そして、学生たちはこのような学修機会を大学から与えられたことに大変感謝していた。だからこそ授業時間外にも厭わず取り組んだのであろう。また、稲武や新城における養蚕の伝統を絶やさないために、周知し人びとに興味を持ってもらうことが必要で、本調査も周知につながると話していた。そして、報告書として形にすることが、地域への、そしてインタビュイーへの感謝の証でもある、と。とくに丸地氏は稲武での「現代マネジメント実習」も履修しており、稲武への恩返しの気持ちもあるようだ。このように、学生たちの言葉の随所で、真摯な姿勢と、新城のインタビュイー、稲武、そして大学に対する「真心・努力・奉仕・感謝」の精神を読みとることができた。そしてこの精神が、自分（たち）がやらなければ、という主体的学びにつながったと思われる。

4.2　主体的学びを促すプロジェクト――「ハビトゥス」の観点から

教育においてもっとも重要な学力要素の一つが「主体性」である。筆者は本教育研究においても、また、教育活動全般を通じても、学生の「主体性」をいかにして引き出すかを自分なりに考え実践してきた。少し長くなるが、まずは本教育研究以外の場面における実践例とその意義について説明したい。

たとえば、ゼミナールでは、2016（平成28）年から卒業研究の前段階として、3年次にグループ研究をおこない、図書館等でポスター発表させてきた。グループ研究やポスター発表をすることは卒業要件ではなく、筆者のゼミ独自の活動である。これには4年次にひとりでおこなう卒業研究の前段階として、まずグループ研究を体験してもらい、研究をするということがどういうことなのか、その過程を理解させ技能を修得させるねらいがある。ゼミ生たちは、学外者や卒業生も訪れる大学祭などの機会に合わせて、議論やポスター作成のために授業時間外にも集まったり、メールやグループLINEを活用してやりとりを重ねたりして完成させていく。その過程を観察していると、おもしろい現象が見えてくる。

期限内にゼミの時間だけで完成させることができないという見通しが立ってくると、分担決めや空き時間の調整などをおこない、完成までの計画を自分たちで詰め始める（筆者が教員として「煽る」こともある）。それまでの作業量や発言量の少ない学生が、多くの分担を自ら引き受けるなどの行動も見られる。グループのメンバーの眼が、自分の働きぶりを客観的にまなざすことを可能にしていると考えられる。

そして、原稿に対して筆者がコメントをすると、

その部分を中心に議論が拡がっていく。他のグループ、学内の学生や教員、そして学外者といったさまざまなレベルの他者に「見られる」という意識が、かれらを駆り立てているように思われる。

業者に発注しA1サイズのカラーポスターとして出来上がったものを見ると、どの学生も嬉しそうに確認をする。このように、「授業時間外にもがんばった成果」が目に見える形になると、「大学生してる」と感じられるようである。つまり、授業時間外にも学びに取り組むという「主体的学び」の成果を見える化し、いわば成功体験をさせるのである。

同様の取り組みは、講義科目においても実践してきた。筆者は筆記試験の際、講義資料内で使用しているものとは異なる文言で出題することにしている。当然、内容を理解していなければ解答することが難しい。したがって、復習として、講義内容に関する「チェックシート」なるものを出題する（これも、講義資料内で使用しているものとは異なる文言で出題している）。ただし、その正誤は評価せず、あくまでも参考にするのみである。成績に関係ないとなると実施しない学生もいる。しかし、実施すれば確実に理解は深まり、学期末試験にも有利となる。それが分かると、学生は「自ら」取り組み始める。つまり、評価とは関係ない課題に取り組むという「主体的学び」という疑似体験をさせそれを習慣化させることで、「主体的学び」の成功体験をさせるのである。

ここで述べている「主体的学び」は本来目指されるべき主体的学びではないかもしれない。なぜなら、教員が「仕向けている」ものだからである。しかし、「主体的」実践が身体化され、習慣あるいは「ハビトゥス」（habitus）（Bourdieu 1980=88ほか）と化すことで、主体的な実践が生み出されるのではないだろうか。ハビトゥスは社会的に獲得されるものではあるが、本人に帰属する能力や素質として機能するのである（Bourdieu 1979=1990）[9]。

こうした教育実践を踏まえ、本教育研究においてもとりわけ学生の「主体性」の発揮と育成に努めた。申請前の調査設計段階から関与してもらうことで、お仕着せのものではなく自分たちの課題という意識が高まったのであろう。準備段階から授業時間を過ぎても議論を続けたり授業時間外に相談に来たりと、主体的な動きが見えてきた。「お金を出してもらっているのでがんばらないと」という気持ちや「自分の力になっている」という意識も働いていた、と学生たちは言う。

松井氏は4年次に卒業研究の一環として自衛隊関係者に海外派遣に関するインタビューをおこなった。対象者は30代から50代までの4名で、うち2名は面識があったものの、4対1という形式でのインタビューであった。インタビューガイドの作成やアポとりからすべて自分ひとりでおこなったのである。彼女は「新城調査に最初からすべてのプロセスで関わっていたからできた」と述べていた。

また彼女は、就職活動時、学生時代にがんばったこととしてこの新城調査の話題を「話しまくった」と言う。彼女はG科目も履修済で、量的調査の一連の技能も身につけている。だが、そこでの演習については学内調査であったことから、あまり語ることが浮かばなかったそうである。なお、断っておくが、量的調査として学外調査をおこなう場合は膨大な費用と時間を要するため（そして失敗が許されないため）、授業の一環としておこなう場合は学内調査になるのはやむを得ないことである。だが、学内という縛りが、必ずしも問題意識を強く感じないようなテーマ設定を余儀なくさせ、また社会との接点を実感しづらくしているのかもしれない。

丸地氏も本調査が「実際の社会とつながっている」点におもしろみを見出していた。学外の社会について学び、そこに貢献しているという意識が、学生の自信につながるのだということを改めて感じた。なお、丸地氏は筆者のゼミ生でもあり先述のポスター発表も経験しているが、研究することに知的なおもしろさを感じるようになったと言う。持続可能な地域貢献に関心を持ち、本調査経験を経て、大学院進学も視野に入れるようになった。

このように、ふたりにとって本調査（あるいはゼミなどの他の授業）における「主体的学び」の経験と成果は、かれらの「ハビトゥス」として身体化されたように思われる。教員が学生の主体的学びを引き出すための支援として、専門的知識・技能を修得させる際に社会との接点を実感させるとともに、「主体的学び」の成果というある種の疑似体験としての成功体験をさせることは有効な方法の一つであろう。この方法は演習科目では実践しやすいが、上述のように、講義科目でも不可能ではないと考えている。

4.3　学年が異なる学生同士の「役割演技」

筆者はかれらの様子を客観的に見ていて、異なる学年であったことも、「主体的学び」を促すことに一役買ったのではないかと考えている。

大学の講義はもちろん異なる学年が受講している。だが、学年という障壁を超えて相互に関与する学修機会は思いのほか少ない。授業内でグループ分けをする場合、同学年同士のグループが形成されがちである。また、学生たちが大学生活において学年の障壁を超えて関与するのは、主に部活動やサークル活動のような授業外の機会であろう。そうした諸状況のなかでは、授業についての話題が出るとしても「内輪話」的なものが多くなりがちで（〇〇は単位を取得しやすい、△△先生は厳しいなど）、授業内容について議論したり質疑応答し合ったりといった相互行為は生じにくいと考えられる。

実際、松井氏も丸地氏も、同学年や友人同士だと「ぐだぐだになっていたかもしれない」が、異なる学年だったことから「適度な緊張感があった」と、口を揃えて語ってくれた。ふたりの話している様子を見ていると、確かにそれは感じられた。丸地氏は松井氏に対してつねに敬語で話すなどして敬意を示しながら「後輩」として接し、松井氏は丸地氏に就職活動や卒業研究のアドバイスをするなどして「先輩」として接していた。ある作業をどちらがやるか決める時には、丸地氏が松井氏に「僕がやります」と手を挙げたり、インタビュー時に次の質問がなかなか出せず沈黙が流れていた時には、松井氏が口火を切ったりと、後輩だからこそ（少々嫌なことにも）先輩よりも先に手を挙げ、また先輩だからこそ困難が生じた時に先頭に立っていた。このように、ふたりは先輩／後輩を「役割演技」（role playing）（Goffman 1959=1974）しつつ学修しており、その「チームで働く力」は、客観的に見ても非常にバランスの良いものであった。

こうした学年が異なる者同士の間に生じる適度な緊張感は、たとえば学外実習の際にもしばしば観察できた。同学年の前では「つっぱっている」ような学生や、同学年でもごく限られた人としか話すことができない学生が、子どもや高齢者、あるいは社会人といった年代の異なる人びとの前ではにこやかに会話をしたり的確な説明をしたりと、年代を超えた相互行為がかれらの主体性を引き出していた。そんな時、筆者は「あの子と話してきなさい」などとは一切言わず、ただ学生たちと同じようにさまざまな年代の来場者に対応をしているだけである。そうした適度な距離、適度な緊張感が学生間に生じるとき、主体的な学びを促すことができる契機となるのではないだろうか。

文部科学省も推奨する高大連携事業は、高等学校から大学への接続の観点、言い換えれば、高校生が大学レベルの教育研究に触れる機会を促進する点が強調されている。しかし、大学生が高校生と授業内で対話する機会は、大学生としての「役割演技」を促すことから、むしろ大学側にとってのメリットが大きいようにすら映る[10]。

もちろん、以上のことは、ただ学年さえ違えば実現されるということではない。教員の側にも、学生たちの「役割演技」を促す工夫と、目的意識を強くもった教育的態度が求められる。

5　第２回調査に向けて

今後の感染状況次第ではあるが、2021（令和３）年度中に第２回調査を予定している。だが、松井氏は今年度をもって卒業するため、第１回調査を踏まえた報告書の一部を執筆してもらうこととし、第２回調査は丸地氏と２人で実施することになるだろう。ただし、彼も2021（令和３）年度をもって卒業予定であることから、できるだけ早い時期の実施を目指したい。そして、稲武および新城の養蚕後継者獲得について一定の展望が見え課題解決に近づいたとき、「pisa 型学力」の成果も見えてくるであろう。

リモートでの会議や授業などが当たり前になりつつあるが、本調査の対象者にとってはけっして当たり前ではない。コンピュータの操作に不得手な人もいるし、さまざまな事情で自宅にインターネット回線を引かない人もいる。こうした「当たり前」にも私たちは敏感でなくてはならない。

第２回調査および報告書執筆に際してもっとも重要なことは、X 氏の話してくださった内容の取り扱いである。「書かないで」と言われたことは書かないというのは鉄則である。しかし、彼の話を省略することで、肝心な部分が説明できなくなる恐れがある。

社会調査における倫理の問題については、社会調査のテキストにおいて必ず言及されている。社会調査協会の定める「倫理規程」[11]には、この規程が「質の高い社会調査の普及と発展のために、調査対象者および社会の信頼に応えるために」十分に認識され、遵守されるべきものであることが記されている。したがって、社会調査における「倫理」と言った場合には、道徳的な正しさだけでなく、知識と技能のうえでの正しさも含まれる[12]。つまり、社会調査における倫理問題は方法論の問題でもあるのだ。

森岡（2007）は、標本調査と事例調査（本稿の文脈では量的調査と質的調査）における倫理問題の違いを、匿名性と物語性という 2 つの軸で整理している。質的調査は匿名性が低く物語性が高いという特質を持つが、その特質ゆえに、ききとりのみに依存し二次データなどによる確認や補強を怠っている調査が少なくない、と指摘している（森岡 2007: 223-4）。

筆者は、二次データ（新聞や著書など）が誤っていて、自分で見ききあるいは体験したデータの方が正しかったという経験が何度かある。とはいえ、インタビュイーの記憶違いや誤解あるいは捏造の可能性がないわけではないため、森岡が指摘するような作業は必要であろう。だがそれ以上に、なぜそのような「改ざん」が生じたのか、その物語性を忠実に記述していくことも重要な作業ではないだろうか。

第 2 回調査では、第 1 回調査の結果、お話をきく必要が生じた別のインタビュイーへのインタビューも計画している。その際、X 氏が危惧するような懐疑的な見方や誤解などがきかれるかもしれない。だが、こちらの物語が事実である、と軍配を上げるようなことは、調査者のすべきことではないだろう。第 1 回調査で、筆者は当事者間にある「距離」を感じとったが、その「距離」は、報告書を書くことで、いやそもそも調査をおこなうことで、明白なものになってしまうかもしれない。こんなことは思い過ごしかもしれない。調査目的に照らしたら、必要のない心配かもしれない。しかし、それほどに社会調査、とりわけ匿名性が低く物語性が高い質的調査には、危うい側面があるということを、丸地氏とともに十分意識しながら第 2 回調査に臨みたい。

謝辞

本教育研究は、2019 年度愛知学泉大学学内 GP の助成を受けたものである。実施にあたりご協力いただいた海野久栄氏と X 氏、また、「社会調査法演習（質的）」の受講生であり研究協力者であり本教育研究の対象者でもある松井美冴希氏と丸地賢典氏に謝意を表する。

なお、本稿をまとめるまでの間に海野氏のご逝去の報に接した。心よりお悔やみ申し上げます。

注

(1) 本学の「建学の精神」は、2020（令和 2）年度現在、「宇宙の中の一つの生命体である人が、個人として自立しつつありとあらゆる生命体と共生することによって、生きる意志と生きる力と生きる歓びに満ち溢れた鵬のような大局的な存在となること」である。だが、「学部等の教育目標」において、現代マネジメント学部も家政学部もともに、「『真心・努力・奉仕・感謝』の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な」知識・技能を身につけることを目指しており、その知識・技能のなかに、建学の精神・社会人基礎力・pisa 型学力が含まれている。したがって、教育現場では、学生も教職員もより具体的に意識しやすいこの四大精神を「建学の精神」として取り扱い、四大精神を含む教育目標の達成の先に、上記の「建学の精神」を位置づけることができる、と考えられる（https://www.gakusen.ac.jp/u/univ/idea.html, 最終閲覧日 2021 年 1 月 4 日）。

(2) 学校法人安城学園，2016,「学園だより」.

(3) 「pisa 型学力」については、2016（平成 28）年に開催された学校法人安城学園の第 18 回報告討論会（テーマ「建学の精神と社会人基礎力と pisa 型学力を核にした教育で勝負できる学校を作る。」）において、次のように説明されている（https://www.anjogakuen.jp/staffs/fd/#18th，最終閲覧日 2021 年 1 月 6 日）。

> 本法人において「pisa 型学力」とは、3 つのタイプの能力（課題を解決するために必要な知識・情報等の資源を獲得する力、獲得した知識・情報等の資源を活用する力、獲得した知識・情報等の資源 を活用して課題を解決する力）を統合した課題解決型学力のことである。

第 19 回の報告討論会においても「pisa 型学力」の育成を含む本学園独自の教育システムが強調され、第 20 回では、教育システム「学びの泉」（仮称）を 2022（令和 4）年度から本格的に開発・実践すべく、スケジュールが示された（anjogakuen.jp/staffs/fd/#20th，最終閲覧日 2021 年 1 月 6 日）。

(4) 経済産業省による「社会人基礎力」は、2017（平成 29）年度に、「人生 100 年時代の社会人基礎力」と銘打って、個人が「企業・組織・社会との関わりの中で、ライフステージの各段階で活躍し続けるために求められる力」として再定義された。したがって、この定義における「仕事」とは、他者と協働しておこなう活動というように広義で解釈すべきであろう（https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html，最終閲覧日 2020 年 1 月 5 日）。

(5) 社会調査士認定機構は 2003（平成 15）年 11 月に任意団体として設立された団体で、2009（平成 21）年に、一般社団法人社会調査協会となった。

(6) 新城市「出沢（すさわ）やままゆ養蚕所（新城まちなか博物館）」（https://www.city.shinshiro.lg.jp/kanko/machinaka-museum/suzawa-yamamayu.html，最終閲覧日 2020 年 12 月 26 日）.

(7) 一般財団法人古橋会，2019,「稲武地域の養蚕業と大嘗祭繒服（にぎたえ）調進について」（http://kaikokan.org/osirase.pdf，最終閲覧日 2021 年 1 月 5 日）.

(8) 『時の絲ぐるま』製作委員会，2019，4K 映画「時の

絲ぐるま」公式サイト（https://www.tokiito.com/，最終閲覧日 2021 年 1 月 5 日）.

(9)　ブルデューはこのことを、上流階級のハビトゥスが社会的に獲得されたものであるにもかかわらず、かれら自身の能力や素質であるかのように機能し、他の階級との「ディスタンクシオン（distinction，卓越化）」をもたらすという文脈で批判的に述べている（Bourdieu 1979=1990）。性急な議論だが、こうしたハビトゥスの獲得過程とその機能は、主体的学びを促す教育に応用できるのではないかと筆者は考えている。なお、ハビトゥスの概念については、Crossley（2001=2012）および堀田（2012）も参照のこと。

(10)　文部科学省「高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について」（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/06040408/001/004.htm, 最終閲覧日 2021 年 1 月 5 日）.

(11)　一般社団法人社会調査協会，2009,「倫理規程」（https://jasr.or.jp/jasr/documents/rinrikitei.pdf，最終閲覧日 2021 年 1 月 5 日）.

(12)　この意味では、学内で実施されるさまざまな調査（アンケート）に際しての倫理審査の重要性も、強調してもしすぎることはないであろう。

引用文献

Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: Critique sociale du jugement*, Editions de Minuit.（石井洋二郎訳，1990,『ディスタンクシオン 1・2』藤原書店.）

Bourdieu, Pierre, 1980, *Le sens pratique*, Editions de Minuit.（今村仁司・港道隆訳，1988,『実践感覚 I』みすず書房.）

Crossley, Nick, 2001, *The Social Body: Habit, Identity and Desire*, London : Sage Publications.（西原和久・堀田裕子訳，2012,『社会的身体――ハビトゥス・アイデンティティ・欲望』新泉社.）

Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company, Inc.（石黒毅訳，1974,『行為と演技――日常生活における自己呈示』誠信書房.）

堀田裕子，2012,「解題――クロスリーの身体論」クロスリー著，西原和久・堀田裕子訳『社会的身体――ハビトゥス・アイデンティティ・欲望』新泉社，297-321.

堀田裕子，2017,「質的調査教育における社会人基礎力の育成――平成28年度愛知学泉大学学内GP研究実施概要報告」『愛知学泉大学現代マネジメント学部紀要』6(2): 51-64.

森岡清志，2007,「統計的調査と記述的調査における倫理問題――研究指針の作成をとおして」『先端社会研究』6: 213-33.

（原稿受理年月日：2021 年 1 月 7 日）